まうちの梅

へ13
2919
3

へ13
門
2919
巻
3

昭和九
七月
六日
購求

春色籬の梅巻之三

江戸　爲永春水著

第五回

再流鳥雅ハ小濱を尋て居所の庵ホいらつしゃ行き人ハ
なべてして不圓も千鳥に名殺而て夫に與のとをとくらしが
いまゞ恋こゝ恋も其身も妻を持ーとゝとゞ明ーこゝれて彼岸と
云分らせて吸ーを脱ぐ云こゝろつて小濱の序を今こゝ〳〵と
待居る中　千鳥ハ横迚の菓子ぐら夕膳を設へて鳥雅へ出

さぜうぐら　「アノウお嬢さんハ此度一人で此去地へ参るさ
まーこの久　鳥「イエ外に連もどざるまーこ　私ガ名ホ小濱を等
なくありまーこうこう連の者ハ追留いうて居る家人頼して参て
来ますまーこの外　「ヤ左様でどざるまらそれでハお連ガ
お嬢ーるまうてお手でいたせのませうれ早く小濱さんガ帰
だと解のホモウ同ら暮まらうこうこうどまーこ　鳥「ようどど
お嬢さんお独りの所ハ私ガ長居をいたしてきどいた所てもん
ざ　ものませうぐ宅ホ　清まーこて帰ら　まだ久まこと明日来り

ませうぐ宅ホ　「ハイ左様ならまでを　「イエ左のホもよろしまーこ　ものがあひらうお亂の義で
どざるまらばお寺も同様み庵で徐方ござるませイョあーこ
久ラホ小濱さんか呼ばれて　時ハ思入まこ久ーぶらでハ他
意ホおまんるまるまーナヲホ〜〜〜〜又お嬢さんもモウ〜〜〜〜
ぞど義理ぐらておらでるひと寄利ガ　ろるふどざるまらハ今
まで仕ガ小濱さんガお嬢さんの変を苦労にしておるぐら
ろうーこ　三尺さまる　私ガ容易変ちやアあてませんハ　鳥「イエ

そこでも私を捨て家をでてゐる伯父とあがありまゝこゝ
手ア〳〵まぢを拾ひ変を云ひ云ひ「と鳥
見へ来ゐる お婆さん 小さで 多ひ ひとををやて出発成
まゝ〳〵 玉ホたるゝの 手所へ 小淀ハ 梅里ゝ 手所ホ 使ふ
八重 居の 入口より 小〳〵 ゐ鳥さん さぞ 淋〳〵 ゐさらふ ねえ
トのゝ 変 関て ゐ鳥ハ 久ぶり 小淀さん ゐ人 まゝ〳〵
清兼 きゐて 居ゐ 小〳〵 や 左 振ゐ 人 まゐゐ ゐ人 出来ぐ まゝ ホ
淋〳〵 ゐる 変ぐ 出来て ゐゐ も 人と 同 ゐ ホ ゐ ゐ て

敢て 来 まゝ ハ 「 私ぐ 嬉〳〵 ゐる 変 ゐ ト 見 れ ど も
知 ら ぬ く 「 や 〳〵 ゐ ぐ ゐ も 少 淀 ホ 向 ハ 「 ゐ の 変 ハ 伯
だ ら 知 ら ゐ ひ ぐ お 来 ハ ま ゐ 〳〵 び ゐ ゐ ま ゐ ど 淋 〳〵 ゐ る 変 ゐ
お や ま ま ハ ま ま ご の ホ 多 ま ま 来 く お 帰 ゐ ご れ 人 サ ゐ 〳〵 早 く
変 人 住 で 類 を 出 覚 上 ぢ 見 ゐ ゐ 変 れ 重 ト ゐ 人 見 て 中 淀 ハ 合
ま ゐ ゐ わ ど 去 ま 変 を 梅 里 に ぢ 送 ら れ 来 ゐ 〳〵 私 を 来 ゐ ぐ ゐ
お 島 に 頼 み 二 人 を ゐ て 芸 ハ 「 お 島 さ ん ハ お 二 人 ハ 忠 え
ゐ ゐ お 新 み で 生 ハ ま ハ お 出 の ぐ ゐ 「 ま 空 ぐ ゐ ゐ 「 ア 行 実 正

だらうと此方へおとなげやうすの白ねへトいのち一ッふせがる
鳥雅が身をやうに手新人若殿見まで小浪とゆふもの
事のしんハ梅田由兵衛に影を見合　鳥や　ヲヤ梅田さん小ん司
鳥雅さん人が拝見してア此宅へト涙夢の中ら梅田が後を
浮して　梅ヶ　鳥雅さん扨御新して当家が此のよう未森田サア
大事ぞござ御ざう松の老ア　きッぢう了しこう　身がて来さ
早もく　梅田様とアやア　狐　小でも　化さまことのぢやアあつま
よあへ子が根も命長がゆきせん尾童人いつをめの恐付込で

狐の正体ならぢやアあやまりせん子ト四辺を見まわし見すれバ
きて力を鏡にて喜ぶ事顔色を濡らさらねさゝもこのいきさ気
一同に座敷へ通りて揆時其の挨拶不やすくと思案が
小浪ハ鳥雅を一団ひとまづ梅田ハ梅田さま此御しに一あまり
狐を思ひくの同善の言葉の今止きのへしが梅田ハ子
鳥に向ひ　挨　時に今鳥さん今お事の中を通り候
母公様の使ひ夜でお坊の身分も乱まんも世間へ知らさ
狐よ身の上同ド家中の人達の思ひくも

ちぎりこて
鳥雅小濱
きたる
尼寺のあり
慶ふ
めぐりあふ
會

他人の批判もあるものぞかし 作者も悪さうと云て夫婦ふ
成て見見て居るといふ 作者もあきらめてハお前も悪さんも懇ひま
付て悪しゝ又市毎公さうも依古見て居る 作者市家中
も陽成しても書ハ 作者サウと思ひて あきる子 イ上
そもそハ宅初のうち 私も左様思ひて 侍ヨ そ上 ハ して
居寿、 ものてうう 弟子 後生の変や 関景の乃理を聞き
てうう 出ハ 重後の 隠ふも 知ん 深んで 居る 作者 ありきく
ものヨ 作者 して 今夏 悪さんと 聞て 夫婦ふ ふるるんそもいふ

強ひあるもハ 梅 左様 隠便 ハで あるるくば 私もまと
甚く 実の 姉 親ハの 知ふ 門て ち 世話をするが 作者
悪さんと 作者 左様でござるが 作者も 悪さんのことを
門 こと思て 侍の ハ 作者 時も ちと ら 見 関景 やら
であるハ うさ ぽ を思ひて 作者ハ とうくと ハ でも
悪ま 悪さんヨ 梅 ナニ 作者 ハて ちや アモウ 思ひ 門 くる
悪さんの ハ 作者 ハ も 悪さんが 一 その 紙に
門て 別 て 作者 て ハ 私が 内屋 ふ 内

為を清と申奴もあり 仕方かあるとは変りて左様に言せ
ものくなそそとでんこ〜 婦後の行ハ 私ゞ病合てあるものの
安清すると 拙ことしてとろろ左様思つて明日ハ出行のは
源長さまふ おのもを預りて 私と同津小連立て帰る様ふ
ものとぶりと お玉を伴〜安みそハしてあまとバ梅甲ゞ 心配も
ものとあらびまと一同人 島様と小濱ゞ為ちやうえーて
仕ふ 国せハ言葉づくハ小ヘアレサマア 私の ものを受をう 言吹
ものとハョ早〜りくハ先達て勝負 身紙 源してとろ 嘉様

不氣味なことせさのハ私の身ごろう 後ハモウ お帝様ゞ行
様ふ深浅をものとりくとりてもそやア 浴方ゞあるゆ
せんけまとも行時もたるまるのゞ者みお帝さんの側を放
まさのハ元私の母人アの仕ふうと変とハ言ひ多ろ その
深ふまでお帝さんの身ふ込すゞあり時ハ私の意しひ
くくハの変で海 ものとけでもものとひと気ぬよう せーひ色を思ひ
切りて 松ゞ母人身紙 源して お側ふ居る時ようも余事に
お帝さんの身を神さまや 佛さまく お願ひ中て 仕方辛別

条のみひ拾ひ拾ひさそさ年季ゞ海んごら獲るるば
和合さまを手に拾ひとまする石もるく苦労さして居る
あるこのホ伺ぞ私が他ひでもして身代限りしさあ男ひ家威
て八宅ホ悔ーふきるまを八に今ホ子ゞ島さんホ聞て山見
成ヨ思所伺拾ひで居ろーるろー涙を落して島殺ホ
ぐゞ付て泣て居る 鳥ハ十二年そやヤ日中ーッろあの樂
のホーも関て兼ねーて居るけまど久しい収穫ス退去の拾
さまを節の哀しひのを思ひおーて竟思ふ赤もるこンゞアる

必ず腹立て多ゞ人ゞ居ろるるるるこんゞ間の
便りに聞るのを毒ホーるで私ゞ家を尋ろるのナ
小ヘコヤそして江の浦の岩窟の中ろ遠 同浦ゞ上ゞ陸ゞ
ぐゞ貧の八安正久 鳥ヘ ろんの変でるくれ子ゞ ゞ年の
背中へ去れて通ろのを着ゞ時に八伺拾ひびろくをーゞ
ろろ側ホ居ゞ連ゞ膝を潰して祭るくろあるゞゞのろ
小ヘヨくく 連ゞあり手ゞこの久 鳥ヘ嘉り連ゞあるろ
ひ度八関係につまて沙きのひゞ宅へ帰ゞを来にむひの

人をよこしたらば其氣で待て居て呉んるかしらと
待まをしたのの先達て因縁が悪ぐ出来る今の世の時
さあが此所へ出張居らさるのを占をして行方を人傳る
夫はまぐわし早いうち此庵へ同居して時節を待て居る
其中夫是非尋ねて来る者があるであらう其時ハ直に
のるを呉るうと云ふらおしも早くちかさんと逢度の
を辛防して居るこんでおやまをあるを張ぬめぐを会てう
ナニさるをまたのあらいでも是非お来ぬと同道に行まを

左様して呉るのをハヨト鳥羽の頼紙見つめて居るその
頼を鳥雅も傍と見物るぐらひの中にろう紙うら紙男ひ
出し元来深く迷ひし中彼方雲ゥ頼うちの仰て
さん勘氣をうけうわぐ與を薦ゥ母し出潰るまバ魂も
うろうろ茫然を手法をうまて抱ゑる折ゥ鳥ハ開
紙を明て まへ少潰さんヤトひッ去やて名ひぐら
理もあのぐ恨ゥしひれ人ト元の殘義へいまバ梅イヤ九ス
先列ゥ彼行の安を問ふと思用ても

ぞ不居さぶ ゆ濱さんハ 鳥雅さんの 元素ッ・こゝの情人
ゝまト 同バ 多島ハ 迎ー 小濱の こゝ〜ゝ より 先刻 鳥雅の
尋 極て 来ゝ〜 こゝを ゝゝ〜く 大あに 梅〜ゝ〜 左振 ゝ子それ
ぢやァ 外人 ゆも又 むづゝ〜の 一件 がある 以人 多 アゥ 左振 行バ
先刻 アノ 鳥雅さんが 恋さんと 兄弟 ゝ不ゝ川 てお 生ざゝ
変てござゝ 手ゝ 鳥雅さん 妹のあるさゝ〜も 小濱さん
不同 せんが 振る 縁でもゝ〜 只 兄弟 ゝ不 おゝ〜のゝ
極ト 鬼角 新ゝして ゝゝ〜 ゝ八 梅里も 善不 法 久けを

斬て 梅里ハ 鳥雅に 内〜 小濱と 多 鳥のことを 相法ゝ
けるが 鬼ても 今 真に お花の 変も お多のゝも 自然不
言ゝ〜き 笑 ゝと 思ひけ ゝば まづ 行ゝゝ〜 梅里 あゝ
らひゝて 小濱ゝの 鳥の 二人を 連て 先へ 帰 あき その
後 あて 鳥雅ハ 江の 島に 残ー ゝる 人〜 とも 不ゝ
へ 帰 あ 第 多の 病 を 付る 相法 もあ ゝべ ゝと 法 合を
極 ゆ そ ゝ 不 ハ 梅里の 別 荘に 小濱と 多 鳥を 頼り
益 おゝ むきを 両女の 得 ゝ む 振 ゝ 言 ゝ ゝ ゝ 振ハ

庵ふ行を明し聖日庵主の居公の帰りましましバそ
始終を告ていとゑの文を預ひけるふ元来拾ひて
主しころ居れ系るまバ早速に関海ゑひ松ゑ
両女ふ代る代る行ゑ小濱とゑ島に八浦表の
文まそそも教刑おまてれいとゑを賜をけるバ両女八永き
恵この程を涙ぐゑ中上て梅里と喜ぶ布ふ伝ゑと
将時島雅ふ引別ま先達て東の空人おもむけバ島
雅八江の岩人帰ゑ行けて

第六回

世の人ふ金のこゑゑをまろせて一寸呂ゑ友情姫殿と友人ゑ
八橋舎ゑ戯ま哥も男ゑ入まバ実ふ瓜ゑゑの潤八しきゑ
をも捏ゑて、ひちこそ十ま家ふ梅里のまらひゑて鍾舎ゑ
伝八まて一小濱とゑ島八まゑ梅里の陽信行に鼻紙落着て
伝文もその差島ゑ伝せけるゑ伝故ゑ島雅の江の信ゑ深ゑ
来ゑ八まゑ鳥の情人ゑ一恵ゑ鳥ゑも達せ者バ合ゑの中ゑ
ざる文と思八居ゑ一しゑ或日梅里八伝行ゑ出て自宅ふ八ま

鳥と小濱と婢女のこのと淋しく永き日の春の日を厭くらや
られて居けるが風呂の湯の涌しまでお女ハうかうかと湯に入て
縁側に出て髪を梳分け爪をとりなぞしけるが 小「お鳥さん出し
様なことを言撥ぶがネ 手「ヱ何をへ 小「アノネ お前とお前と私と此
宅へ来てからモウ七月ばかりになるが梅里さんがいまだになんとも
私達の事を捫議してお客でないのハなぜだろう知りておいでか「イヱ
何の道理だか気が付ないが只忠さんに逢しておくまでなんのせ
合点が行ないとなまり思ふて居ますわ 小「そまハアノ中々逢せ

らまない理もあるまいと私ハ推量して居るけれども子
お前ハ始終の所何ぞせうと思ひてお望叶へやう
でも種々に考へて居ますれハ 手「私も気をもんでハ居ますけれ
ども何をいふても忠さんに逢ないちやア訳ないと思ひますのコト
されどがふに小鳥ハ温雪なまう 小「ヲヤお前ハそんな事気をみつけるのを
おまへさんが子忠さんでもいへしく不合におまへでござらう病身どうや
何ぞいふ気でおまへさらう知らないのまそまでなけれどバカらしい見て
お前のまへがさと思ふのヨ 手「左様サ私ハお前の島雛さんも為ならへ

てお前の節の心持なら早く帰りておまへの方から寛々と
云て上るの夜ハ縁ハしれねへトいふ小濱ハ涙を眼にうかめて
まア悔しうござんす 米「アノウ 今鳥さん左様いふと御前を云やる
様ごけれども兎ても忠さんの心も鳥雅さんの心も元来の
様ではなし毎度に喜悦おふくさんをかりておまへの身がうら子
私らちのちがまで居る様子を言ちやアならひヨ 千「モシお内室さん
まア丑 小「アレサ 鳥雅さん八丁堀坂町に居る唄女のお光さんと
いふのを此宅の梅里さんの妹分にして一生を貰りて女房に

云て云うも其お花さんと此家のお内室さんと忠さんの内内室
さんのお前さんとの人のとつまり此度江の島へ参る人お前のを
いふ事ではそして忠さんのおふくさんにおつさ前さんとりの八子
梅里さんの實の姉さんとか 千「ヲヤ左様なら私きやア同様で
忠さんのお内室さんにするなら仕方がないけれども先ず忠さんが
お内室さんをお持ちやアあるまいと思りて居さのかねへト
云ても少し涙ぐむ 小「まアごうらう子お前も私も貰ひ泣きをしん
けれバ分からひヨ 千「何様してそんなしの事をお聞なさる実に

小濱ひとくさ
鳥雅な花の
ろくさをきく

悔しい支うこと泣き出しをつく「ア子私もその仕業島雅さんの
身に出るうぶありて八海ちゃんと男川てあぞらく真後源して
松ぐ男人送入ることのごけまと明して仕ちゃひうちそ後又
ありて島雅さんぐ松ぐ情を出ぐうとりて拾方も
ちゃうけごけまど今のおれさんとりくあうきさんが牧人のようス
うて氣をちんで支婦又おうりごと関て来ると脇ぐを男八
まこ恵さんとやうも左張ちうち眺みお男人金ちゃうるうどの
支でハちゃりくさくまたおれの主家も早く松ぐちゃひらしい

娘と情合をしてそまこ直が文房が成でちゃりて結ぐ
ちゃひうれ人表人ともが脇ぐ達引のちゃひ支くを思くハ
ちくう結うくれ人早く方達て男入帰くを表後ちんでの
すぐヨ「ナラ」拾方がちゃひうう浅草や松ぐ表商売さん
達に男くびらまうちゃひ松ぐすうよりみハ下ちゃぐちゃひヨ男
らまうくうく「アレサ主家も氣ぐ張て主ちゃひうう汚ちゃひ
ちゃア意地をして出ちゃるれ人ちゃ「ヲ」そまぐうでも松ぐ人
うちうちゃひものヲ小「ア」子見くびらまうるいちゃの八松の推参ぐ

けもどもアハハヨ　ハ　してお家をば梅里さんが鎧倉手でさづ
紙でおいでなさるゝ姫様　お家を幕累れ　歳でもいる
まいり　ものもみな島雅さんがうばれて来てお呉のうるゝ
まんざらう　実ー　ものふ成の　でもあるまいけもどもまこと
あれ　女のかとりのハ左様さるけて　居らるものでハるひらう
おまさんハ　お家を邪魔ごと　男ひざらう　私をば　おまさんが
牧ナ　ホ　ふ　遠ハ　ヨ　子八　ナ　ハ　で　モウ　同居　ハ　居
らるひョ　ハ　アレサ　山方が　居様　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

不間ざらう　妾と　ハ　君の　ハ　ハ　ざ　ら　ハ　歳　ら　ハ　ハ　ハ　ハ
同家　ハ　居る　様　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
だらう　尊敬　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
まで　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

トさすがの山演ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
思ふ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

さて腹を立てしうどもは
るべ〳〵考へて見ると
らん〳〵ハ三子ハ
ゑとは仰しても
あて長次郎さんも
さんは遠のひ中ハ
よて忠さんを
ハ男さん

方へ
男さん
意地悪根生を
左様も
そして
乗ごとも
小〳〵
のうへ

まるるものゝ又其上でごけまでも手を行ぐ為婦の秘傳ごハりでも
男の為とゆふりのゝ女ゞ金ゆとやさしく仕ふると深ふそふよ
男門て行ふあひョと言て仕方ゞ極婦ふとゝ思入ふ仕居き
ゐひと他の女ゞ逢て節ゝ女ゞ上ふにとゆひうゝて巾覆ふ
其方へ寄て仕手ゆうう警ゝ行ふ女布無ふあゝても
男女ゞ情人ゞ出来ても行ふ嘉ふう嘉ゞふゝ天ひ
慶手でおもしろく為ひと思ひ嘗れるゆと男紙夫印ゞ取板
つて居てそゝて仕方ゞ寒ふ思ふひ用ひをして行命

正銭切ゝ為ふて行ゝ見世ふと男の分でも異世きゆんで
為て仕方の表情をふる機嫌をふて異ふう他人ゞ笑
やふゆるまひふを思ゆると為ゞ川ても異るゆんゞ八隠
仕方でふう命ゆ見世ふと向ゞ角婦で行ふひよ
ゆ〳〵〳〵〳〵そふでも私ハ方一男ゞ腰をゝて気相を尽
さふると天〳〵ゞを男ゆふう姉〳〵ッてふふひョ小ーナア一
そふハ大丈夫ごふかゆ〳〵〳〵氣の毒ひふとゆ男ひで
ゆひ実ハ子男に十分為気ゞふと行と思ふう命婦をせふと

男ども八正宗のお内室さんとゐろて八沙汰ひょ仰でも男と
いふものハ押通して側ニ居る女房ハ海へ男ハるゝで別宅のと
仰れしてもらハめぐるゝ自中ハ逢ぬひと云理ゐ変ぬして
も逢ハ来ぬるものゝごろう仰でも手ハ此度のこと人ハ私のうゐ名
ハ能てゐ放しと風をして覚らけあるて お糸ゐ海へ為覚
がゝもる孫よゐるゝ私ゐまこと鳥雅さんと空ゐをとさせて
楽しゐるゐ人ゐゝ幸彷して居ると田舎ゐゐひろ見
兼一花咲せる氣ぢハゐ度お糸も左孫ゝて内ハ見ゐト考ろゝ

お鳥をすゝるける

あるより鳥雅ゐ旅ゝそひゐどろ保ゝぢゝゝ変ぬく
お花お玉の哀あゝそひよひをゝ人ハおもむき居宝の
一藩ゐゐこゝゝ編三海ハ微を償ひて出板 跋引
ゐく直に發行ゝゝん

春色籬の梅巻之三了